

第〇学年〇組 △△△学習指導案

指導者 ○○ ○○

研究主題

各教科等におけるICTを活用した「わかる授業」の創造
～児童同士が「対話」を通して理解を深める学習指導法を探る～

研究仮説

各教科等の学習指導において、授業のねらいに即したICTの活用をすれば、児童が思考の場面で対話し、理解を深め「わかる授業」が効果的に実現できるであろう。

1 単元名

理科・体育科・生活科・総合→単元名、社会科→小単元名
国語科・外国語活動→単元名と題材名を併記
音楽科・図画工作科・家庭科→題材名
道徳→主題名と教材名を併記
特別活動→議題名（学活1）または題材名（学活2）

2 単元設定の理由

- 本学級の児童は、……（児童観）

本学習での子どもの実態（積み重ねや成果も含む）と課題について、次の二つの視点で3行程度述べる。

- ① ICTの活用 ② 対話的な学び

例)

～ができるようになってきている。
～を苦手とする児童が〇%いる。

- 本単元では、……（教材観）

教材のねらいや研究仮説とのつながり、学習の系統性などについて、3行程度述べる。

例)

～をねらいとしている。
～の学習へとつながっていく。

- 指導に当たっては、……（指導観）

子どもたちに付けたい力と具体的な手立て、単元構成における意図や工夫について、時系列または着眼別に、3行程度で述べる。

例)

第1次（導入の場面）では、～できるようにするために～の工夫については、

3 単元の目標

国語への 関心・意欲・態度	○ 問題について調べ、解決のための提案書を書くということに関心を持ち、問題に関する情報を集めたり、自分の考えをまとめたりしようとする。
話すこと・聞くこと	◎ 話題を決めて収集した知識や情報を関連付け、互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合うことができる。
書く能力	◎ 自分たちの身の回りにある問題について調べ、解決のための提案書を書くことができる。
言語についての 知識・理解・技能	○ 語感、言葉の使い方などに対する感覚などについて関心をもつことができる。

1枚目に収まらないときは、中心となる目標のみ記述する。

指導上の留意点や、評価についての記述を省略するので、別に計画を立てておいてください。

4 指導計画（総時数 14 時間）

次	ねらい	主な学習計画・内容
1	○ 単元の学習課題をつかんで学習計画を立て、学習の見通しをもつことができる。 ①	(1) 学習課題を設定し、学習計画を立てる。 ①
2	○ 提案書に書く問題をグループで話し合っ決めて、取材することができる。 ⑥ 本時を「MSゴシック体」の太字で表記する。	(1) 自分が考えたい問題を見付け、話合いで意見が言えるように取材し、自分の考えをまとめる。 ② (2) グループで話し合いをして、問題を一つに絞る。 ② <本時 2 / 2> (3) グループで決めた問題の解決方法について、説得力をもたせるために取材し、考えを整理する。 ②
3	○ 説得力のある提案書を書くために、提案書の書き方を確認し、話し合いながら提案書を書くことができる。 ⑥	(1) 提案書の書き方を確認し、構成メモをつくる。 ① (2) 構成メモに沿って自分の分担部分を下書きし、書いたものを読み合ったり話し合ったりしながら修正を加えたりする。 ② (3) 提案書を読み返し、推敲する。 ① (4) グループで提案書を清書する。 ① (5) 全体で提案書を読み合い、感想を交流する。 ①
4	○ 単元の学習を振り返り、提案書の配布に向けて準備をすることができる。 ①	(1) 自分が学んだことや提案書を書くために計画的に話し合ったことを振り返り、ノートに学習のまとめを書いたり、提案や発表に向けて準備をしたりする。 ①

5 ICTの活用について

○ 本時においてICTを活用する場面

	活用場面・ICT	活用方法・ポイント	期待される子どもの姿
1	前時を振り返る場面 <電子黒板>	電子黒板に前時の写真を提示し、拡大表示することで既習事項を確認し、本時の活動の見通しをもたせる。	～を想起し、本時のめあてや活動内容をつかむことができる。 文末は、「できる」「分かる」「しようとする」など。
2	～について考え、話し合う場面 <タブレット>	ICT機器の使い方、工夫、ねらいなどについて述べる。	
3	まとめをする場面 <ワイヤレス書画カメラ>		対話的な学びを実現するためにICTを活用する 思考 の場面を太枠で囲む。

6 本時の学習

- (1) 日時 平成29年〇月〇日 第〇校時 於 5年2組教室
- (2) 主眼 (～を基に) ～する活動を通して、～することができるようにする。(主眼が2行以上になる場合は、このような段組みになる)
- (3) 準備
- (4) 展開

場合によっては、教師/児童に分けて書く。

「5 ICTの活用について」で記述した活用場面を★で示す。

	主な学習活動	○ 指導上の留意点 【観点】 評価規準 (評価方法)
導入	1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	○ 前時を振り返り、1回目の協議には「協議の視点」と照らし合わせて改善点があったことを意識させることを通して、本時のめあてや活動内容をつかむことができるようにする。 ★活用場面1
	めあて 1回目の協議の改善点に気を付けて、提案内容を話し合おう。	
展開	2 グループ協議を行う。 (1) 提案する問題について、2回目の協議を行う。 (2) 協議の結果をホワイトボードにまとめ、交流する。 3 ICレコーダーを活用して協議を振り返り、自己評価をしたり全体で話し合ったりする。	○ 納得の上で意見をまとめることができるようにするために、マトリックスシートを活用して協議を行うようにする。 ○ 机間指導を行い、協議がスムーズに進行していない場合には、協議の目的やゴールを再確認したり、グループ協議の進め方シートや話し合いメモを確認したりするように声かけをする。 ○ ホワイトボードを活用して協議の結果を視覚的に提示することで、協議の価値付けをする。 ○ 協議を自己評価できるようにするために、ICレコーダーで話し合いを聞き返しながら「協議の振り返りシート」に記入させる。 ★活用場面2 ○ 本時のねらいに迫るために、抽出グループのホワイトボードやICレコーダーの音声を取り上げ、「改善点はクリアできたか」「どうしてこのようなまとめになったのか」と発問する。 【話・聞】 話題を決めて収集した知識や情報に関連付け、互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合うことができている。(発言分析、記録分析)
	「主な学習活動」の主語は「児童」なので、文末は「する」「行う」などになる。	
	「指導上の留意点」の主語は「教師」なので、「～ができるようにするために、～する/させる」という表現になります。	
終末	4 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を確認する。	○ 自分の言葉で学習の振り返りが書けるようにするために、全体で話し合ったことを取り入れて書くように声かけする。 ★活用場面3
	まとめ (国語科、外国語活動、総合などは省略できる)	
	「主眼」「めあて」「まとめ」「評価」の整合性を吟味する。	○ 学習計画より、次時では提案書の書き方を確認したり構成メモを作成したりする学習であることを確認させ、次時の学習への意欲を高める。

- ◆ 指導案は、原則3枚以内で作成する。発表会などの指導案については、1～2枚追加してもよい(多くても5枚以内)。
- ◆ 枚数には含めないが、座席表を添付する。必要に応じて、ワークシートや板書計画などを添付する。
- ◆ 1週間前までに提出して検討会を開く。完成版は20部印刷する。

スペースがあれば、「予想される児童の反応」や重要な図表などを記載してもよい。